

大串明弘作 「勇気を風に乗せて」

< 前編 >

斎藤美樹 おはよう、千佳。

岡田千佳 (興奮して)あ、おはよう、ミッキー。ねえねえ、知ってる？ 今日うちのクラスにねえ、転校生が来るんだって！

美樹 ウッソー。孝行で転校生なんて珍し…。

千佳 (かぶせて)でねでね、しかもカッコいい男の子なんだって！ さっき聡子が職員室で見たの。わたしの隣に座ってくれないかなあ。でもダメか、隣は隆だもんなあ。ったく、隆なんて教室の後ろのロッカーの中にでも入ってればいいのよ。

遠藤隆 甥、おれがどこに入ればいいだって？ 大体お前は朝っぱらからうせえ。

美樹ナレーション わたし、斎藤美樹。青春孝行 2 年生。この陽気のせいか、最近浮かれてる子が多い。朝から自転車のブレーキのように、キーキー騒いでいるのは親友の岡田千佳。言うまでもなく彼女もその一人だ。いい子なんだけど、カッコいい子に弱いのが欠点かな？ 千佳と話しているのは遠藤隆君。わたしたちとは中学校からの友達、ぶっきらぼうなところもあるんだけど、何かあると力になってくれる‘縁の下の力持ち’的存在。頼りがいのある男の子だ。

(効果音) (教室のドアが開く音)

生徒 起立！ 気をつけ！ 礼！

(効果音) (イスがガタガタいう音)

先生 おはよう！ 今日新しいクラスメートを紹介します。星野^{とある}徹君です。お父さんのお仕事の都合で転校してきました。みんな仲良くしてやってね。えーと、席は…あそこの斎藤さんの隣に座って。斎藤さん、よろしく頼んだわよ。

美樹 はい！

千佳 えー?! ミッキーの隣だってえ。いいなあ。それに引き換えわたしの隣といたら…。

隆 悪かったな、カッコよくなって。男は顔じゃねえんだよ。ハートだよ、ハート。

千佳 え？ ハトが何だって？

隆 てめー、ハトじゃねえんだよ。この野郎！

千佳 キヤー！

美樹 初めまして。わたし、斎藤美樹っていうの。よろしくね。

星野徹 …

美樹 星野徹君っていったわよね？ 徹君って呼んでもいいかな。

徹 …

美樹 (少し気まずく)隣同士だから、お互い助け合いましょうね。わたし、よく居眠りし

ちゃうから、眠っちゃったら起こしてね。こないだなんてね、イビキかいて寝てたらしくて、起きたらみんなグラグラ笑ってるの(笑い)

徹 ...

先生 じゃあ、今日はここまで。居眠りしてる人が多いから、家に帰ったらちゃんと勉強するのよ。今日配ったプリント3枚は宿題。

(全員) (口々に)えー！ ウッソー！ やだ - ！ おれ今日塾あるんだぞ！

先生 あ、それと斎藤さん。できたら友達と一緒に星野君に学校の中、案内してやってくれない？

美樹 はい！ 分かりました！ 千佳、行くでしょ？

千佳 もちよ、もち。隆もかわいそうだから連れてってあげようよ。

隆 「連れてってあげる」だと？ 連れてってやるのはお前のほうだよ。

美樹 徹君、彼は遠藤君。こっちは...

千佳 (かぶせて)岡田千佳です。よろしくね！ じゃあ、早速行こっか。まずは体育館からね。

ナレーション と、その時だった。

徹 ...ほっといてくれよ。

ナレーション 一言ぶっきらぼうにそう言うと、星野徹君はさっさと行ってしまった。

美樹 ちょ、ちょっと待って！ 徹君！

隆 美樹、ほっとけよ、あんなやつ。

千佳 ほんと。人がせつかに親切に言ってんのに。わたし、カッコよくてもああいうわがまな人って嫌い！

隆 おれももう知らねえぞ、あんなやつ。美樹、お前もああいうひねくれたやつに構わねえほうがいいぞ。

美樹 でも、わたし見たの。

千佳 え？ 「見た」って何を？

美樹 徹君が「ほっといて」って言ったでしょ？ あの時一瞬目が合ったの。何て言うのかな、優しくて、それでいてとても寂しそうだったの。わがままとかひねくれているとか、そういうんじゃないような気がするのよね。“友達なんて要らない”っていうような態度だったけど、でも逆に何かを求めているようなそんな感じがしたの。だから...

隆 分かってるよ。だからそんな風に言わないで、力になってあげようよ」って言いたいんだろう？ お前っていつもそうだもんね。

千佳 美樹は熱心なクリスチャンだもんね。何でも善意に考えようとする。美樹の言いたいことは何でもお見通しよ。ねえ隆？

隆 そうだな。(笑い)でも、それでいて結構鋭いんだよな、お前の勘は。

美樹 そこで名案。今日は土曜日で早く終わったことだし、徹君誘って映画でも見に行

こうよ。

隆 映画か！ 映画ならしゃべらなくてもいいからちょうどいいかもな。でも今何やってんだ？

千佳 「FK」まだやってるかな？ わたし、あれ見たかったのよね。

隆 あれもう終わっちゃったんじゃない？

美樹 とにかく、問題は徹君が来てくれるかよ。わたし、先生のところ行って、徹君ちの電話番号聞いてくるから先帰ってて。あとで電話するから。じゃあね。

ナレーション そのころ、徹君の家では…。

(効果音) (玄関の戸が閉まる音)

徹 ただいま。

父 お、徹か。お帰り。

徹 父さん、今日も仕事休んだのかい？ 明るいうちからお酒なんて飲んで。珍しいじゃない。

父 まあ、こっち来て座れよ。

徹 うん。

父 父さんな、こういう緑のまぶしい、空がどこまでも青い季節になると、今でも思い出すんだよ、初めて母さんとデートした時のことを。

徹 へえ。デートなんてしたんだ。父さんも青春してたんだね。

父 当たり前だ。そう、今でもはっきり覚えている。母さんの家の近くにあった公園に大きな池があっただ。その周りを散歩していたら、母さんが「ボートに乗りたい」と言い出したんだ。父さん、それまでボートなんてこいだことなかったんだけど、まさか女の人にこがせるわけにはいかんだろう？ 一生懸命こいだ。でもその割には進まなくて名。やっと池の真ん中まで行った時には、父さん汗だくになっちゃって。そんな父さんを見て、母さんハンカチを出して汗ふいてくれたんだ。あの時の母さんはとっても輝いていた… (涙ぐむ) 今でも忘れられないんだ。美しい真っ青な空を背にした母さんの笑顔が…。

徹 (少し沈黙) まだ母さんのこと、愛してるんだね。

父 ああ。おばあちゃんも言うように、お前のことを思うと再婚したほうがいいのかも試練が、まだ忘れられないんだ。いや、忘れたくないんだ… 徹。人なんか愛さないほうがいいのかもしれない。母さんはクリスチャンだった。いつも教会の礼拝や祈りを欠かさず、「神様は最善をなさる」というのが口癖だった。それが、あんなにあっけなく死んだ。神を信じてたって、人は明日の命も分からないんだから…。

(効果音) (電話の音)

徹 はい、もしもし。え？ まあ… うん… うん。じゃあ。

(効果音) (受話器を置く音)

父 新しい友達か？

徹 うん。まあね。

父 それにしては早いじゃないか。今日初めて行って友達ができるなんて。お前はいいな。そうやってすぐ友達ができて。

ナレーション こうして徹君と連絡を取ったわたしは、早速千佳に電話した。

美樹 もしもし、斎藤ですけど、千佳さん…。

千佳 (フィルター音)あ、ミッキー？ どうだった、星野君は？

美樹 礼のごとく口数は少なかったけど、オーケーだって。

千佳 (フィルター音)ほんと？ なあんだ、やっぱりわたしたちの勘違いだったのね。ほんとにはいい人なのかもね。うん、いい人だったらいいなあ。カッコもいいし。最高よね。

美樹 とにかく5時にマックの前に集合だから。悪いけど隆に連絡してくれる？

千佳 (フィルター音)うん。分かった。5時にマックの前ね。なんかウキウキしちゃうなあ。じゃあね。

美樹 じゃあねー。
(モノローグ)でも徹君、よく二つ返事でオーケーしてくれたな。さっきまで何っても返事してくれなかったの。ほんとに来てくれるかな？来てくれるわよね。キット今朝は具合が悪かったのよ。それで口利かなかったり、すぐ帰っちゃったりしたのよ。うん、きっとそう。あ、いけない、そろそろ支度しなきゃ遅れちゃう。何着てこうかな？

(効果音) (マックの前のガヤ)

千佳 やっぱりわたしが一番乗りね。ここで徹君が来てくれると、ポイント高いんだけどなあ。

美樹 ヤッホー。早いじゃん、千佳。先越されないように急いで来たのにな。

千佳 さては美樹も徹君ねらってるでしょ。

美樹 何言ってるのよ。違うわよ。ただ、徹君が先に来てるといけないと思って…。

千佳 ウソおっしやい！ 顔に書いてあるわよ。

美樹 もう、千佳ったらあ。

隆 オッス。ごめん、ちょっと遅くなっちゃって。

千佳 ほんと。5分遅刻。はい、罰金500円。

隆 何言ってんだよ、お前。ところでやつは？

美樹 まだ来てないみたい。もしかしてマックがどこにあるか知らないのかなあ。

隆 そんなわけないよ。学校行くにはこの前通るんだぜ。

美樹 そっか…。

ナレーション 嫌な予感がした。20分たち、30分たち、1時間たった。「もう少し待ってよう」というわたしの声をしり目に、隆と千佳は帰ってしまった。

美樹モノローグ もしかして、初めから来るつもりなかったのかしら...。
ナレーション 徹君を信じたいのに、だんだん疑いに変わっていく自分の心と、わたしは必死で戦っていた。

<後編>

ナレーション わたしの名は斎藤美樹。青春高校2年生。わたしたちのクラスに転校してきた星野徹君の心を開こうと、仲間と一緒に映画に誘った。来てくれると言った彼は、2時間待っても来なかった。その晩、わたしの頭の中にいるんなことが浮かんできた。

美樹モノローグ どうして来なかったんだろう？ 何か急用ができたのかしら？ 最初から来るつもりなかったのかも...。

ナレーション よっぽど電話したかったが、わたしの心は裏切られたような気持ちに支配されていて、何を言うか分からなかったので、お祈りをして寝てしまうことにした。次の日。

美樹モノローグ やっぱり早天祈祷会に行くとさすががしいわ。朝早く、一日の始めに神様にお祈りする...。ラジオ体操に勝るさすががしさね。徹君のこともみんなに祈ってもらったし。フワアア(あくび)。でもやっぱり眠いなあ。まだ6時前か。あれ？ 徹君？

徹 あ！

美樹 おはよう。

徹 おはよう...。

美樹 今日もいい天気ね。朝ってさ、何かいいよね、空気も澄んでて。

徹 昨日は行かなくてごめん。どうしても気が進まなくて。

美樹 あ..うん、いいのよ。

ナレーション うれしかった。昨日は話し掛けても返事すらしてくれなかった徹君が話してくれた。ゆうべからわたしの心の中にあったモヤモヤも、今はもうなくなっていた。

美樹 教会の早天祈祷会に行ってきたの。

徹 斎藤さん、だったよね。君ってクリスチャンなの？

美樹 うん。うちがクリスチャンホームでね。ちっちゃい時から教会行ってんだ。

徹 ふーん。

美樹 ところで、徹君はどうしたの？ こんな朝早くに。それに汗ビショビショじゃないし。

徹 おれ、新聞配達やってるんだ。今やっと終わったとこなんだ。

美樹 そうなの。大変ね。引っ越したばかりでまだこの辺知らないのに。はい、これ。

ナレーション そう言いながら、わたしはポケットから出したハンカチを徹君に差し出した。

美樹 でも、どうして新聞配達なんてしてるの？

徹 ...おれ、信じねえぞ。

美樹 え？

徹 絶対信じねえぞ、神様なんて。もし神様がいるんなら、どうしてこんなになっちゃうんだよ！

美樹 待って！ 嫌なこと聞いちゃったのならごめんなさい。わたしじゃ何も分からないかもしれないけど、でも話して。話してほしいの、徹君のこと。みんなは徹君のこと、わがままだとか、ひねくれてるとか言ってるけど、わたしはそうは思えない。

徹 ごめん。貸してくれたハンカチを見たら、死んだ母のことを思い出したんだ。昔、おやじが、母のために必死になれないボートをこいでかいた汗を、母がハンカチでぬぐってくれたんだって。クリスチャンだった優しい母なのに、死んじゃった。そう思ったら、ついカッとなっちゃって...ごめん。

美樹 徹君のお母さん、どうしたの？

徹 おれが小2の時、病気で死んだんだ。何でもおれを産んでから、病気がちになっちゃったらしくて。

美樹 そうだったの...。

徹 それ以来、おやじはすごく落ち込んでるんだ。それまではすごく仕事熱心だったおやじが、あまり仕事にも行かなくなっちゃって。仕事はできる人なのに、どうでもいいような仕事ばかりしてる。今でもまだやる気になれないみたいなんだ。まだ愛してるんだよね、死んだ母のこと。昨日も言ってた。「まだ忘れない。忘れたくない」って。そんなおやじを見るのがつらくてね。おやじが背負い込んだ重荷を少しでも軽くしてあげたいと思って始めたんだ、新聞配達。

美樹 徹君って優しいんだね。それに強いよね。そんなお父さんを支えてるんだもの。

徹 (かぶせて)強くなってる！ おれは全然強い人間なんかじゃない。おやじ以上に弱い人間なんだ。

美樹 なら、どうしてああいう態度するの？ 弱い人間だって思ってるのに、どうして友達作ろうとしないの？ ねえ、どうして？ 教えて。

徹 ...君には分からないよ。君におれの気持ちなんか分かるわけじゃないか！ もうほっといてくれよ！

美樹 (泣きながら)どうして、どうして心を閉じちゃうの？ 確かに人間はほかの人の気持ち、完全になんて分からないと思う。でも大事なものは、分かってあげたい、分かってもらいたいって気持ちを持つことじゃないの？ 理解できる関係よりも、お互いに理解してあげようっていう関係のほうが、わたしはいいと思う。分からないかもしれないけど、分かってあげたいの、徹君のこと。校内を案内しようとした時、徹君、「ほっといてくれて断ったでしょ？ あの時の徹君の目、はっきり覚えてる。あの時思ったの。「この人は、心の中ではだれかを求めてる」って。違ったらごめん。

徹 君って... すごいな。分かってあげようとする関係か。おれも、人はそうあるべき

だと思う。そういう気持ちがある人になるんだろうな。でも、おれはもう友達はやらない。寂しくっても友達は作らない。

美樹 どうして？ どうしてなの？

徹 実は、こっちに引っ越してくる前、親友がいたんだ。吉村と聞いた。そいつとは中学からの大の親友で、よくお互いのことが分かり合えたんだ。中学の時は、今から思うと何か変な気もするけど、よく肩を組みながら歩いたっけ。あいつとはそういう男の友情みたいなものがあった。去年、同じだった志望校と一緒に合格してから、おれたちの友情はますます深くなっていった。そんなある朝だった。

(効果音) (車の急ブレーキ音とぶつかる音。)

徹 並んで歩いていたおれたちにトラックが…。あいつだけ跳ねられたんだ。ほとんど即死だった。一瞬の出来事に、おれは涙も出さず、ただ立ちすくむだけだった。

徹モノローグ (エコー)吉村、なぜだ?! たまたまあいつが外側にいただけなのに！ 何もしてないのに！

徹 その晩は一睡もできなかった。おれは神をのろった。母さんを奪い、そしてあいつを奪った神を！ もし神がいるなら、どうしてこんなことが起こるんだ？ 何のために？ どうしておれなんだ？ そうだ、神なんていないんだ。いるわけない！ もう愛する者を失うなんて嫌だ！ 絶対に嫌だ！ こんなに悲しい思いをしなければいけないなら、それならもうだれも愛さない。あとで悲しい思いをするなら、だれも愛さないで今寂しいほうがいい。だから友達はやらない。正直言うと、僕には勇気がないんだ。愛する人を失ってつらい思いをするのが怖いんだ！

美樹 わたしね、徹君みたいな人、知ってる。

徹 え？ おれみたいな人？

美樹 うん。その人ね、本当に愛してた唯一の子供を目の前で殺されちゃったの。助けたくても助けられなかったの。

徹 それで、その人、大丈夫だったの？

美樹 わたしもよくは分からないけど、相当ショックだったでしょうね。ただ一人の子供だったから。でもね、その人が自分の子供を助けられなかったのは、理由があったの。

徹 え？ どんな理由？

美樹 それはね、わたしたちのためなの。

徹 何だって？ どういうことだよ。

美樹 その人っていうのはね、神様なの。神様はね、人間の心に深く根付いている。『罪』を見てね、その罪から救うために、そのいけにえとして自分の一人子イエス様を十字架につけたの。

徹 何で神がそんなことまでするんだい？

美樹 神様は愛だからよ。

徹 神は...愛？

美樹 うん。神様はそれだけわたしたちのことを愛してくださっているの。本当に愛してる人のためなら、自分の一番大事なものを犠牲にしてもいいって思うでしょ？ 徹君だって、親友の代わりに自分が死ねばよかったとさえ思ったんじゃない？

徹 うん。

美樹 でも神様のすごいところは、思うだけじゃなくて、それができることなのよ。

徹 でも、もし神様がおれのこと、そんなに愛してるんなら、どうしておれをこんな目に遭わすんだ？

美樹 正直言ってわたしには分からない。神様の考えって、大きすぎて人間には分かりきれないのよね。でも一つだけ言えることは、かみ様はバチを当てたりするような方じゃない。いつも徹君を、だれよりも大きな愛で愛してる。そして、徹君が自分のほうに振り向いてくれるのをずっと待ち望んでる。そんな方なの。神様はね、徹君の痛みを知ってる。そして、徹君を完全に理解できる唯一のお方なのよ。今の徹君の気持ちを、神様にぶつけてごらんよ。祈ってみなよ。きっと神様が答えてくれるから。

徹 おれの気持ちを完全に分かる人がいるのか...

ナレーション その夜、わたしは徹君が神様に助けを求めることができるように、一心に祈った。

美樹モノローグ 徹君、神様のこと信じてくれればいいな。

ナレーション 時計はもう夜の 12 時を回っていた。心の熱気を冷まそうと、そっと窓を開けると、若葉の香りを含んだ 5 月の風が舞い込んできた。その風を胸いっぱい吸い込みながら、わたしはつぶやいた。

美樹モノローグ 神様、この風に乗せて、彼に“勇気”を送ってください。恐れを乗り越えて、友を作る勇気を。あなたの愛に心を開く勇気を。

< 完 >